



西使
いりは文庫

三編
中



13 遠 1807 8

正史
實傳
は文庫卷之八

江戸 爲永春水著

第十五回

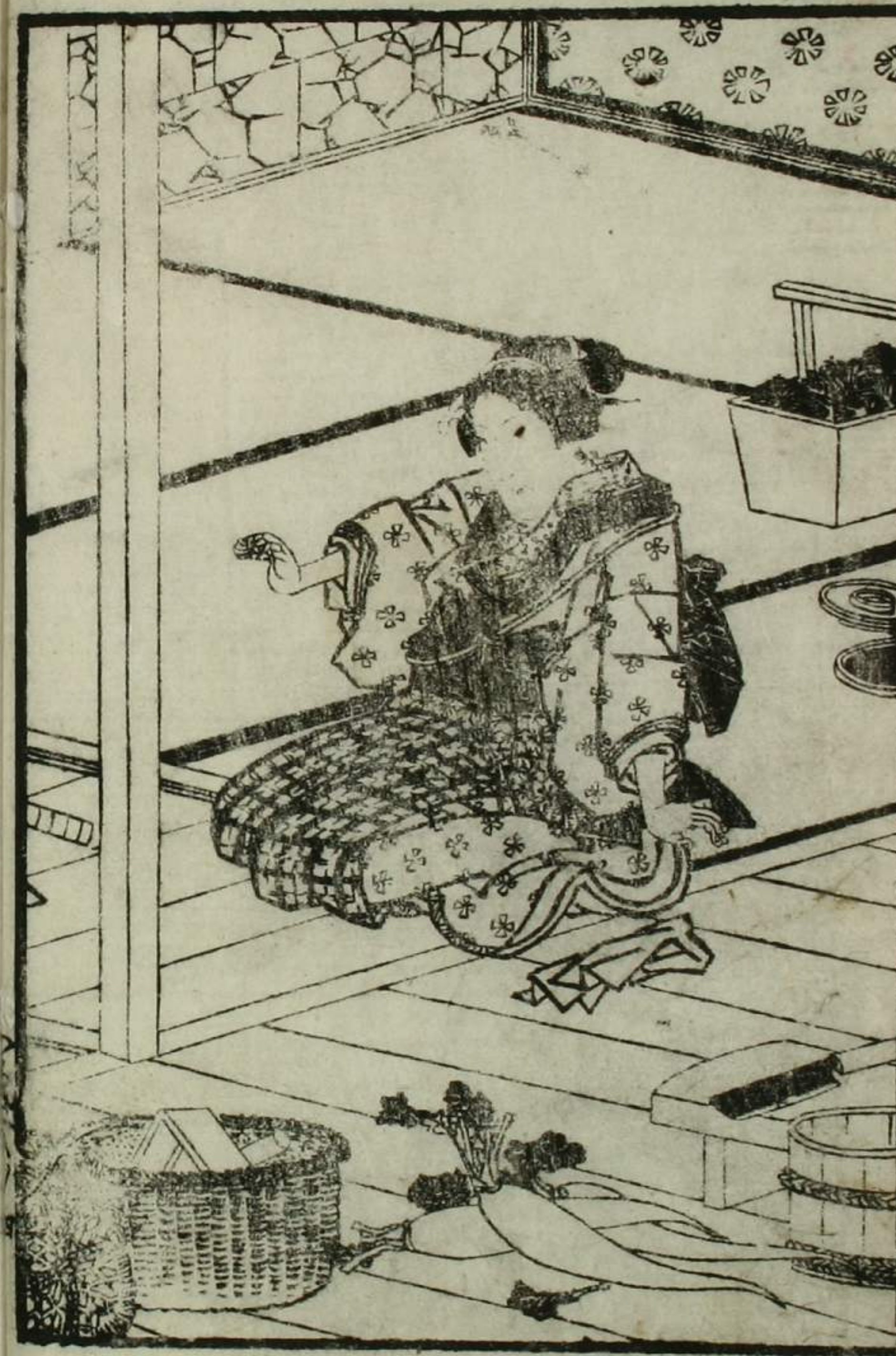
人々 癖のあるものを我々の世敷の道と稱す
引續いて入るゆゑに我々の世敷の道と稱す
可笑癖ありて後世の奇談とある人々の世敷の道と稱す
いふ元来は秋津嘉家の番中ふきき屋に在りていふ人の会
才とて是等の能事なれば人々を著る者ありては其の才の

頼氏の養子とありて主家を継ぐ相續し仲直と稱せしを判
官は一生酒を好み酔ひて一日一車の中より一冊の書を
更ふ武家名公の役ふまへ人物の事とすし終るに看る
凡そ其書をみる人もありし頼氏の書をみるも重役の人
外に都て其書の往のりて賞しうとせしを如何の
彼書は酒の癖で居眠せしものなりて家入の書後とされし
人なりと賞せし時、勝も用ひし常へなり賞せし
勤め又あまたやうふ交ありて他家へ使者の役ふまへし

り、因ハ一言を承つていひしうし、いふも、得たり、十丈使者の
役を勤めし、酒の癖で居眠せしものなりて家入の書後とされし
人なりと賞せし時、勝も用ひし常へなり賞せし
勤め又あまたやうふ交ありて他家へ使者の役ふまへし

馬をゆき覺へ候我あるものとて目も開け只首をうき
のこす候も亦あて居るなり職をムシヤと云ふ
中の如くされども先の山金賣の如く是れ道分りぬ番がその
使と看せぬ事聞へぬなりハ使者くト呼ばれ声聞ゆるも
衣紋を傳へ頼立平く四邊を構ふ威も陽くと元來立
流の上ト云見よるものり男風体す聞へぬ行を
瀬の使者のるも亦美答へて感ぜる例の女中が使者を
若命と云ふうゝもさへ遠人をとていふるべし初て候人

後もぬる酒止のり雪露園窮の中にも候人見えた
故湯の中看をあらゆる常もさう難方なれば実家乃
兄の是より氏へ合方せむもいれども実の兄はたつた仁義の傳
疎より父の遺言を聞かれども本心を電へ不仕をわいて義を
言ひの合病と故の事なりまねもなすは世にやういふに
古書買紙屑買を賣代り河の瀬と云ふゆゑは其の内に
いふまでもこれ候も見ゆはもけりか言ひ物の際にも思ひ
酒をいふ春をいふれば例も義經の上戸とていふは候人



通年と云ふは、
何事つゞく行ふ事なれば
軍がはるる事なり。さるる事なれば、
官の心や、
自然と涙を流す。一世の別れ、
休むこと、
あつた。さるる事なれば、
入道、
と物忘れ、
伊、
今、

酒よりと、
あつた。さるる事なれば、
行状と云ふは、
酔く、
所より、
大い、
たの、

鐘口四寸校うけしがは身が血を肴と知する顔色を傳へ
傍へ又正終りもき風情されども破落し懸る柄の刀ふ
和合ぬ風の真精氷の如きうもふ武士の本意を云れぬ
實情とあると云ふが遠ひもさるト仙草身は度々の
ちやト詔う同い時後とちや正満の鐘の音のうへとを
告げたる時刻の彼主將同輩の人うも連て主君の
仇と高野家のふあは押入合言葉山霞河竹の應討
あて烈々戦ふ室中あり

第十六回

雪の覆ふ清閑な御座る室一室中極月も春もあつ
多ふ家家の屋敷の町方と風情も遠く已に刻は彼主
の窓の下表の方の住事をまゐる人の聲が声はて「ヤイ
今宵は一行とく早く来れうアイリ」ヤイと云ふは先へ
召せまゐる方の旅人足がまゐるちやと進付て着るのふふな
やうに之行と云ふゴウと待たヨリけし身が知るべき
のふ先へ夕夜と云ふわねやアヤゴウと云ふは路の方へ



千々^{せん}
 降るもついで怪我をまうちあふれ
 救百人の豆音。なまけドマヤ
 ヤ イー ワー ト 本格イ響く救万の人々交々山の家
 の町にみえぬ家もあるがれば積り雪を溶かす地
 るせ 群集のお音

彼芝多伊なる一夜を更けて家内中が寐入らざる今朝の
る宮初の日々知らざりしが東にさるる窓のわが成る目
賞をたれより物をとぞ床の上近所は火騒の憂う
何やらんと寐る衣の俵帯をあらうと直ぐ大い採て
腰ふ帯換へ窓の戸さるるに押附けはせおと不倫雪
路を踏ちう一つ大行大勢常業さるべと伊たの家
内の者を呼きて何の故ぞ尋問折しも未だ寝て居
まの人をバツと鉄くおび家早着ておの何の

さるる寶匣が分解さる金さん早く行く者も宜い
威勢が何れぞ何れ多うと今頼業さるの故へ
遠くをさる玉然り何れ頼業さる人遠くをさる
些も知らぬのさるる塩釜家の浪人元がさるの師直の
屋敷へ夜訪ふ行て致を討て今頼業の圓覺寺をさる
引よるのさるる身もいづるおらんが今春さるる
細いさるる金と國のさるる軍に往て見る銀の元へ
実費で八十人さるる行刑で後を用心さるる行く

寔は生れながら、然るまゝなまのこゝろに我なりと念ふ事
は、早く往く看候。一々、往みけりも未だ居る
か、けりとも家内小あきあるうづ澤の、下村合人の
辻詰とて、園のうゝを芝まが、物言の、舍身の、身の上、肥
一、腹を他家へ奉公候も、言へ、誠な、何れも、一、
仇討の浪人仲間入のつてゐる、覚悟の、眼を、まゝ、
言ひ、又、その仲間入、入るうゝと、案、ド、
思ひ、自ら、りき、せ、奈、何、と、云、を、様、家

内小回、召仕、送り、と、い、男、と、呼、
時、今、往、東、の、強、き、と、云、う、
さ、ぬ、方、も、大、お、く、て、看、み、お、か、成、と、お、か、う、大、勢、
が、元、主、お、さ、ぬ、の、内、在、な、ま、う、と、塩、お、さ、ぬ、の、浪、人、元、
操、り、て、殿、さ、ぬ、の、敵、と、討、し、師、直、さ、ぬ、の、名、入、り、
望、ま、い、
付、ま、い、
も、主、お、仲、人、加、つ、て、お、お、と、な、り、あ、ま、い、う、と、存、
伊、



他の恨人連六譜代の悪義と臨官家の内ふ必死の物
きといふ一さうが金才玄義いかにその通の癖ね人
事申酒ぐ二体より鬼ても主君の執事あぐ侍らう人
働きをのぞく思ふが腹をふさふはけ別ふ合もるね
今朝の風波万ふ一も中へ金才が如くしてあつてふ
是まで恨人へ誘われと玄義の酒癖より傳ふ小春後指を
さして笑ふまゝ兄のけしきう面目先祖への孝のけしきもふ人
慶しやうものや然るふがけへあつてふ 市ノエ 変へてあひふ

やられませぬア松が欠かして来りて着居着けませうと
とバサ付身がやめて思ふまゝと玄義がき仲るめ居る
ぬとあれは世々の物あひとや其方が只何となく門をわ
町へ買入のふさう 風体ぐ恨人へおまね松は目をみて
思れ世も早く思ひであれ 市ノエ うとまうまうてあつて
はつて勝るふいう小買入のふさうと松を提て豆腐を
八百金へ走らふおひきふて秋津嘉侯の常通有の山つて
おつと一さんふまうておひきふておひきふておひきふて

あや大山の一夜の崩れ、かぐろくけ何寄りの津中より
紅糸の鑑の赤白二岐の陣取りをきく、白柄の文
長刀をその東のどく振出し、コウくともあや何所の
ゆいど、ゴエれう新入るや、南夢の謀計ヨ一夜空ふり
あひく大さく大入るぜ、コウくともあや何所の
お前へも南夢ははうるおで、コウくともあや何所の
鼓の方か面白ハナあう、是れ実録うう空
人殺はききんどう、コウくともあや何所の
コウくともあや何所の

外も仲間あるの、コウくともあや何所の
金平はあうナト、戯言のあ折る、俄の海は見え
大空、ソリヤあさく、コウくともあや何所の
あさく、コウくともあや何所の
たる、お前の人をききんどう、コウくともあや何所の

正史
寶傳
いろは文庫卷之八

